

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520230

研究課題名（和文） 近世ドイツ鉱山・山岳伝説の研究

研究課題名（英文） Reseach of mine and mountain legends in the early modern Germany

研究代表者 吉田 孝夫 (YOSHIDA TAKAO)
奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40340426

研究成果の概要（和文）： 中世末期・近世以降に伝承されるドイツ鉱山・山岳伝説を、ドイツの精神文化史に位置づける試みである。〈山〉のモチーフがもつ異界と通過儀礼の場としての機能を、ドイツ以外の日本・中国の文脈にも目配りしつつ考察した。中世よりドイツが牽引した産業である〈鉱山〉としての山岳では、異界としての伝統的観念を担う一方で、中世と近代の過渡期である近世の変容と矛盾を如実に映し出す鏡となっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： The study is an attempt to locate the German mine and mountain legends since the end of the Middle Ages and the early modern age in a spiritual culture history of Germany.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	400,000	120,000	520,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：独文学

科研費の分科・細目：独文学

キーワード：伝説、グリム、鉱山、山、異界、人文主義、通過儀礼、日本霊異記

1. 研究開始当初の背景

中世末期・近世から 20 世紀に至るまで伝承されてきたドイツの鉱山・山岳伝説は、G. Heilfurth と I. =M. Greverus による『中欧ドイツ語圏の伝説伝承における鉱山と坑夫』（1967 年）という膨大な伝説集に、包括的に収められている。Heilfurth は、この伝説集を一例として、ドイツの鉱山文化全般について数多くの著作を書き、この分野における第一人者となっている。残念なのは、この伝説集が「第一巻 資料編」と題されながら、その解釈・研究編の完成をいまだ見ることなく

今日に至っていることである。類似説話や二次文献に関する詳細な注釈を付されながら、この伝説集はなおその解明の時を待っている。

一方、ドイツ文学における鉱山・坑夫モチーフについては、ロマン派を分析の中心的な対象として、欧米圏では Ziolkowski、Schlaffer による俯瞰的な論考や、Frühwald によるブレンターノ詩の個別研究、また日本では今泉文子、柴田陽弘らの啓発的な著作・論文がある。しかしロマン派以前、つまり 18 世紀までの鉱山観の分析は、従来の研究でも

手薄なものにとどまっております、本研究は、それを主要な対象することによって、ドイツ文学と鉱山という重要な問題圏の理解のために、不可欠の基礎を築きたいと考えたのである。

また日本のドイツ文学研究では、中世末期・近世の研究の蓄積が浅い。秀逸なる数名の研究者を別にすれば、近世の言語文化の研究はなお多くの手付かずの場所を残しており——それはゲーテ・シラーのドイツ古典主義を全ての中心に置いた旧来のドイツ文学史観によるものでもあろう——、またたとえ17世紀が研究の対象となる場合でも、それは〈バロック〉の名称のもとに独立して行われるのが常であった。

私の研究はむしろ、16世紀と17世紀とを一まとめに、つまり〈近世〉あるいは〈初期近代〉の名のもとに捉え、この時期のドイツの言語文化を、ルネサンスと宗教改革に始まり、後の18世紀啓蒙主義に至る時代という、広い枠組みのなかで読み解くことを目指している。はたして鉱山は、ルネサンス・人文主義の時代が生み出した最新の技術を導入され、いわば時代の最先端に位置した場所であったと同時に、とりわけドイツ・ザクセンの鉱山は、宗教改革の揺籃と成長の地ともなっていた。そしてさらに18世紀以降の近・現代ヨーロッパにとって鉱山は、貨幣制度の浸透・成熟と近代重工業の成立・発展、自然破壊と資源枯渇という問題において、近代の宿命を予示する一つの文化的トポスと化すのである。

そこに芽生えた数々の伝説伝承は、鉱山・山岳という場所に関わって生きた人びとの、さまざまな思いを内にはらむはずである。ドイツの伝説研究は、メルヘン研究に比してかなりの遅れをとってきたが、L・レーリヒの数々の労作を代表として、重要な礎はすでに築かれている。一方、日本の伝説研究では、異界としての山岳を論じた、柳田國男以来のいくつかの論考が目を引き、ドイツの伝説研究の蓄積を徹底的に踏まえつつも、この日本の文脈での山岳・鉱山観念とドイツのそれとを接続、ないしは比較対照させてみることは、必ずしも無意味なことではないと思われた。

また英米圏では、山岳と美の関係、山岳観の変遷についての考察として、M・H・ニコルソンの『暗い山と栄光の山』(1959年)という重要な著作がある。アルプスの山々をめぐり、近代ヨーロッパにおける崇高美の誕生を論じたこの著作においては、イギリスに類似するものとして、ドイツに関する言及もわずかに見られるものの、なお詳細に論じるべき点を残している。近代における英独の鉱山開発と鉱山イメージは、実際にはかなり対照的なものを含んでおり、それを考え合わせることで、〈山〉という、自然界の大いなる問題

に対するドイツ的解決のありさまを照射しなければならないと思われた。

2. 研究の目的

本研究は、中世末期ならびに近世以降のドイツに伝承された鉱山伝説・山岳伝説を、ドイツの精神史、文化史のなかに位置づける試みである。近世という過渡期的時代の諸問題が、伝説伝承、とりわけ山岳をめぐる伝説伝承のなかに、いかなる形で沈殿し、物語として、同時代の人びとの生活にいかなる形で奉仕したかを明らかにしようとした。

中世末期から近世にかけてのドイツは、ヨーロッパ有数の鉱山国であった。フッガー家、ヴェルザー家は時代の指導的な役割を果たす鉱山会社を営んだが、それは同時に宗教改革という近世ドイツの重大な精神的変革を惹起する出来事ともなった。鉱山とは、中世的〈迷信〉とルネサンス的〈科学〉とが錯綜する、近世特有の空間である。ここに民衆の信仰心と想像力は大きな刺激を受け、鉱山・坑夫をめぐる不可思議な物語の群れが繁茂したのだった。

ドイツ文学史を顧みれば、鉱山・坑夫のモチーフは、とりわけロマン派に、そしてロマン派の影響を受けたその後の幾多の作家たちにとって看過できない役割を担う。いわゆる〈ドイツ的内面性〉の表現として、魂の内奥を探る坑夫のイメージは実に好適なものだった。

ところで、このロマン派の果実であるヤコブ・グリムの『ドイツ伝説集』、つまり中世・近世の民間伝説、歴史伝説を収集したこの書物が、ほかでもない数編の鉱山伝説で説き始められ、またそのなかに数多くの意味深い鉱山・山岳伝説を収めていることは重視されねばならない。ドイツ文学と鉱山モチーフとの関係は、単にロマン派において突発的に生じたものではなく、それ以前のドイツの文化的・社会的・民俗学的背景を除外しては考えられないものであることが、このグリムの著作から推察される。ここで重要な資料として浮かび上がるのが、ドイツ各地の鉱山に伝承されてきた——そしてグリム自身もまた深く参照した——鉱山・坑夫の伝説群である。鉱山モチーフのもとにドイツの精神史を語ろうとするならば、この近世の基底層に立ち返ることは不可避である。そしてその果てに、いわゆる〈ドイツ的内面性〉の揺籃期の姿が明らかになると考えられる。

3. 研究の方法

従来のメルヘン研究にしばしば見られた資料的批判性の欠如、観念性の先行を排し、以下の項目に基づきながら、できうるかぎり徹底した文献学的検証をめざした。

(1) 伝説 (Sage) /メルヘン (Märchen)

概念の吟味と先行研究の調査

(2) 近世鉱山学書の入手と分析

(3) 近現代に著されたドイツ伝説集からの
鉱山・山岳伝説の抽出と吟味 (とりわけ G・
Heilfurth の伝説集の吟味)

(4) グリム兄弟『ドイツ伝説集』の成立過
程とその基礎資料の検討

(5) グリム兄弟、とりわけヤーコプ・グリ
ムの古代観と神話論の検討

(6) 近世の知識人の動向の調査 (とりわけ
人文主義と教育)

(7) 近世ドイツの鉱山経営と経済史の調査

(とりわけ G・アグリコラの著作の検討)

(8) 宗教改革時代の俗信・迷信観 (とりわ
け M・ルター)

(9) 中世カトリック世界の死生観の検討

(とりわけ L・ゴッフの著作と『黄金伝説』
の検討)

(10) 古代シャーマニズム論の検討 (とりわ
け C・ギンズブルグの諸研究)

(11) 日本の文学と伝承における山岳観念の
調査 (『日本霊異記』研究を参照しつつ)

(12) 日本民俗学における他界観、異人論の
検討

4. 研究成果

(1) 総論

ドイツ文学と鉱山・山岳というテーマは、
古典主義・ロマン主義以降のドイツ文学にと
って、例えばゲーテ、ノヴァーリスからホー
プマンスタールに至るまで、中心的なモチ
ーフの一つであったと述べてよい。従来の研究
も、好んでこのモチーフを取り上げてきた。
しかしこれを、ロマン派などの近代文学の文
脈からいったん切り離し、中世末期と近世の
時代性そのものにおいて考察したものは、管
見のかぎり、ドイツのわずかな研究者を除い
てほかに見られない。ドイツ文学と鉱山の関
係を問い、いわゆる〈ドイツ的内面性〉にと
つてのその意義を問うならば、まさに鉱山が
ドイツの主要産業であったこの古い時代に
遡ることなくして、歴史的に正当な考察を行
うことはできない。

その際に一つの導きの糸としてみたのが、
日本の山岳伝説研究である。周知のとおり、
柳田國男には、ある意味で中途の仕事とな
った山人研究がある。『遠野物語』には鉱山
のモチーフが随所に見え隠れする。この柳田
の研究を修正・補完しようとする谷川健一、赤
坂憲雄、小松和彦らの諸研究を含め、これら
をドイツ鉱山伝説の分析のなかに織りこむ
ことによって、日独の民間伝承における相違
と類似が明らかになる。本研究は、狭義のド
イツ文学研究を越えて、領域横断的な研究・
考察を行うことを目指した。

3年間の研究経過を簡単にまとめると、ま
ず初年度では、近世人文主義者ニアウイスの

人物像と著作を検討することで、近世特有の
文明観と自然観を探った。一般の研究では、
伝説伝承といえはすぐさま民衆層に目を向
けがちであるが、本研究の端緒としては、む
しろ民衆層と支配者層の中間的・媒介者の存
在であった人文主義者に視点を定めること
によって、近世における山岳・鉱山という環
境の全体像が、より鮮明に見えてくると思わ
れたのである。

次年度は、ドイツの伝説研究のパイオニア
であるグリム兄弟が編んだ『ドイツ伝説集』
の冒頭の鉱山伝説を取り上げ、そのヴァリア
ントを並行して検討することで、時代の死生
観の変容と不変である要素とを確認した。

最終年度は、日本の山姥に相当するドイツ
の妖怪 (ホレさま) を取り上げた。単なるメ
ルヘンの妖怪と化している昨今のイメージ
に対して、山の霊的存在としての本来の姿か
ら捉えなおし、古代の山の女神として、わず
か一つのメルヘンにとどまらず、さまざまな
伝承の中に類似の存在が確認されること、そ
してそれが人間の通過儀礼とシャーマニズ
ムに深く関わることを確認した。そして同時
に、ナチス時代を経験したドイツ民俗学なら
ではの厄介な問題、すなわち古代ゲルマンと
の神話的連続性をめぐる論争についても考
察を加えてみた。

(2) 各年度の成果

① 2007年度

近世ドイツの鉱山・山岳伝説研究を始める
にあたり、まず当時の鉱山空間そのものを社
会史的・文化史的に位置づけることが求めら
れた。その素材として取り上げたのは、中世
末期から近世への転換期に生まれた二つの
鉱山文学資料、すなわちリュウライン・フォ
ン・カルフの『鉱山袖珍』とパウル・ニアウ
イスの『ジュピターの裁き』である。中世の
秘儀的鉱夫世界から、やがてフッガー家など
大資本の支配下に置かれ、近代技術と貨幣経
済の洗礼を受けてゆく近世的鉱山への変貌
がそこには確認される。

前者では、大地母神の観念を抱く錬金術の
世界観と、キリスト教の聖ダニエル信仰を共
存させ、聖なる山の観念を維持しているの
に対し、後者では、盛期人文主義者 G・アグリ
コラに典型的に見られる、技術的操作対象と
しての自然観への過渡期的立場が見られる。
ニアウイスの作品中、人間に裁きを下す運命
の女神フォルトゥーナは新しい時代の到来
を予言しており、人間の功利性のため自然が
適宜利用される立場を肯定する。いわば男性
による自然開発を、古来の母なる女神は押し
とどめることができず、別の世俗の女神フォ
ルトゥーナが現われて、新しい流れを追認す
る形になっている。

このフォルトゥーナ表象は、中世から近世

にかけての西欧文学に頻出し、とりわけ当時人気を博した民衆本『フォルトゥナートゥス』において、人間の世俗的処世知と貨幣経済の重要性を説く作品の要となっている。異教的表象としてのフォルトゥナーはまた、ニアウィスを含めた人文主義者たちの好んだモチーフでもあり、世俗化してゆく世界観の傾向を象徴している。

なおこの年度においては、伝説と文学の相互関係に関わる従来の研究活動の成果として、ドイツ東部のクラバート伝承に由来する20世紀小説と、スイス・ベルン地方の山岳・蜘蛛伝承に関わる19世紀小説について、それぞれ論文を公表した。

② 2008年度

前近代における鉱山表象の文化史・社会史的概観と自然観の検討を行った昨年に続いて、今年度は、グリム『ドイツ伝説集』冒頭に置かれた「三人の鉱夫」伝説の起源と機能に関する研究を行った。まず、1960年代にドイツの民俗学者のあいだで交わされた、この伝説の起源をめぐる論争を回顧し、1) 古代的・前キリスト教的心性の残存、2) 中世キリスト教的煉獄観の反映、3) 特殊鉱山的な異界観という3つの立場を確認した。

民衆層の世界観は、しかし例えば日本の地藏信仰がそうであるように、根本的に折衷的なものであることに留意すると、ドイツのこの三者の議論も、排他的に対立させるよりは、むしろ有機的に関連付けあうことが望ましい。はたして「三人の鉱夫」伝説は、不慮の死を忌避する民衆的な死生観を基にして語られた中世以降の死者伝説・死霊伝説の一翼をなしており、近代以前の葬送観を反映する物語として捉えることができる。

やがて近代文明の重要な担い手となる鉱山を舞台としながら、「山霊」という鉱山の妖怪を救済の媒介者とする中で、この伝説は、おそらくは不慮の事故によって死んでいった多くの鉱夫たちの鎮魂を行っている。葬送儀礼の役割を、伝説という言説が担うのである。しかも鉱夫たちは、生死を司る異界としての山、という古代的な山岳観と、信仰の功德というキリスト教的な救済観との融合において、いわば二重の埋葬儀礼を受けているのである。

なお、印欧語族の神話伝承研究に重要な仕事をなしたデュメジルの論争相手の一人、P・ティーメのインド学に関わる論文の翻訳にも、協力者として参加した。

③ 2009年度

今年度は、ドイツの民間伝承に頻出する女の妖怪〈ホレさま〉をとりあげ、これを鉱山・山岳伝説の枠組のなかで捉えることを目指した。一般にはグリム・メルヘン第24番の

イメージが先行するこの妖怪だが、起源的には、ドイツ・ヘッセン地方土着の山の女神である。同じグリムの『ドイツ伝説集』には、この〈ホレさま〉を含め、各地の山の女神に関わる物語が含まれており、これを主な素材として、ドイツの山の女神の姿を明らかにしようとした。1) まずグリムの神話学的著作によりながら、古代の冥府と豊穡の女神とのつながりを吟味し、2) 次に女神から人間に与えられる贈り物のモチーフが、デュメジルのインド・ヨーロッパ語族研究に見える三機能構造説と合致しうる可能性を論じたあと、3) 最後にシャーマニズム（ギンズブルグ）とインキュベーション（西郷信綱）の観点から、この山の女神が、人間の通過儀礼に関わる異界の存在でありうることを示した。

しかしこのような古代との神話的連続性の主張は、ドイツにおいて、偏狭なナショナリズムと結びついた暗い歴史を持っている。論文の後半では、その問題の検討として、1) ナチズムとの関係をめぐるギンズブルグとデュメジルの論争の意味を考察し、2) グリム自身の観念的にすぎる古代崇拜と恣意的な文献操作を指摘して、その著作には、むしろ近世資料の比重が実に大きかったことを確認したあと、3) 最後に、戦後ドイツの異端の民俗学者ポイカートを取り上げ、グリムと同様、文化的多様性の認識と〈ドイツ的なもの〉の探求との両極に揺さぶられる辺境出身のドイツ人の姿を追った。そして4) 〈ホレさま〉と古代の女神との連続性も、最新の文献学的研究によって、実は非常に限定的な主張にとどまることを指摘した。

(3) 今後の展望と残された課題

ドイツの山の妖怪として〈ホレさま〉を検討した今、この山の女神、女の妖怪に対して、ドイツの山の男神、男の山の妖怪の代表格である〈リューブツァール〉の研究を進めることが、次なる焦眉の課題である。〈ホレさま〉と同様、単なるメルヘンの子供だましと化してしまっているリューブツァールであるが、これもまた本来は、ドイツ東部リーゼンゲビルグ山脈に土着の山の神であった。現在はポーランドとチェコの国境となっているリーゼンゲビルグ山脈は、ドイツのかつての重要な鉱山地帯である。ドイツ鉱山・山岳伝説研究のまとめとして、日本の天狗と山姥の一对に対応するであろう、この両者の山の神を、総合的に検討することが求められる。

また文献学的手法一色で行ってきたこの研究も、民間伝承という対象をもつ以上、わずかでもフィールドワークの要素を加えていくことが必要であろう。リーゼンゲビルグ山脈の風土だけでなく、ドイツ東部国境ゲルリッツのリューブツァール博物館に所蔵される資料の調査も必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 吉田孝夫、山姥・グリム・近世——ドイツ〈ホレさま〉伝承の周辺、希土、査読無、34号、2009年、57-111
- ② 吉田孝夫、山霊と冥界——グリム〈三人の鋤夫〉伝説の問題系——、外国文学研究、査読無、27号、2008年、149-194
- ③ 吉田孝夫、鋤山のフォルトゥーナ——パウルス・ニアウイス『ジュピターの裁き』における近世ドイツの鋤山表象と人文主義、希土、査読無、33号、2008年、2-25
- ④ 加治洋一、吉田孝夫、パウル・ティーム「puja : インドの言葉と習俗」(翻訳)、佛教学セミナー、査読無、87号、2008年、1-19
- ⑤ 吉田孝夫、蜘蛛〈女〉への洗礼——J・ゴットヘルフ『黒い蜘蛛』におけるスイス村落共同体——、奈良女子大学文学部研究教育年報、査読無、4号、2007年、43-53
[奈良女子大学リポジトリ公開]
<http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/123456789/590>
- ⑥ 吉田孝夫、小麦粉のような雪——オトフリート・プロイスラー『クラバート』、希土、査読無、32号、2007年、84-114

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 孝夫 (YOSHIDA TAKAO)
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号：40340426

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者